II—8　レトリックから見た日本文化の特質

（議長　大石慎三郎）

発表　李御寧

一

日本人のレトリックの特徴は、神代の時代まで遡る。須佐之男命の乱暴に驚いて岩屋に隠れた天照大神を、万の神々は言葉のコミュニケーションで説得しようとはしなかった。

西洋のレトリックは、シラクサの土地所有権の訴訟から始まったと言われている。だが、日本人のレトリックは、討論のコミュニカシオンよりもイメージを造るシニフィカシオンから芽生えたといえよう。長鳴鳥を鳴かす、鏡を造る、そして裸になって踊る、といった戦略はみな、闇から造り出した〈朝と光〉の記号である。と同時に一方では、直接力に訴える天手力男命の力コブが構えている。柔らかさと硬さ、虚構と実体が共存する二刀流の策略である。ギリシアのレトリックがアゴラの真昼から生まれた光のレトリックといえば、日本のそれは岩戸の中に閉じ込められた闇のレトリックである。自己の意見を主張して相手の態度を変えさせる弁論とは違い、岩戸を開くレトリックは、言語によるロジックよりは物質的イメージによって、相手を誘引したり、すきを狙って実力に訴えたりする反説得の世界である。「古事記」には天安河原に集まり議論をする神々の声は、ただ蝿がぶんぶんする音としか書かれていない。

日本人がもっとも好む忠臣蔵にも、天の岩戸を開くレトリックが同じパターンで深層に潜んでいるのを分析できる。

すべての事件にはその発端となる原因があり、それによって明確な点が現れてくる。だが、赤穂のイベントには、その要素が欠落している。刃傷事件を犯した浅野内匠頭は城内での問いただしに対して、〈ただ私の遺恨のため〉とのみ答えている。肝心な原因に対しては言及していない。吉良上野介もまた、〈刃傷を受ける覚えは全くない〉といっている。言葉でもって自分を弁解したり相手を説得したりしようとしないのが、武士の気質であったからである。逆説的にいえば、口を閉ざす反レトリックが、武士のレトリックなのである。

自分を偽装するために、木屋町の遊女と遊ぶ内蔵助の悲痛な笑いは、まさに天宇受売命が踊る暗い闇から聞こえてきた「あの笑い」である。そしてまた壮快な討入は手力男神の力技である。

作品の世界でも、忠臣蔵はシニフィエでなくシニフィアンのディスクールに依存している。「仮名手本忠臣蔵」のネーミングは、赤穂義士の四十七士と「いろは歌」の四十七文字を踏まえたホモロジーである。また同時に「忠」の手本である赤穂義士を文字を習う仮名手本になぞえる意味も含まれている。もっとも重要な関係は、七文字ずつ並んでいた江戸時代の仮名手本の各行末尾の文字だけ読むと、四十七士の状況と同じ〈とがなくてしす〉の隠れ文字が読み取れるということ

である。

忠臣蔵を仮名手本と結び付けたレトリックは、単純な概念のアナロジーではない。二重、三重の複合的記号作用である。「いろは歌」を意味の世界に還元すると、仏教の無情観が現れる。その理念からすると四十七士の儒教的行為とは真っ向から衝突する。そもそも殺人とか復讐自体が否定されているからだ。仮名手本から内容を排除し、その形式だけを残すときはじめて、忠臣蔵のレトリックが可能になる。「いろは歌」そのものがすでにシニフィアンの体系によって刻み込まれた記号の世界だからである。

二

このような日本的レトリックの特徴は、西洋はもちろん、同じ東洋文化圏においてもコミュニケーション・ギャップを起こす恐れを含んでいる。天の岩戸を開いたレトリックをこのコミュニケーション・ギャップと関連させて分析すると、次の五項目に要約される。

一、言葉の指示作用と指示物のずれ―同じ漢字圏でもそのレトリックのためにコミュニケーションの混乱が起こる場合が多い。日本の店はほとんど、クローズしても閉店と書かないで〈準備中〉と告示する。時計が故障を起こしても、故障といわないで〈調整中〉と示す。みな同じレトリックである。イメージが実物とはなれ、独り歩きしている。だから老人が痴呆症になってもうろく状態になっても、〈恍惚の人〉と呼んでいる。外国の言葉でも日本のレトリックにかかるとその意味が変質して、大邸宅を表すマンションが小さいアパートの部屋を表す麗しい言葉になってしまう。敗戦は終戦になり、軍隊は自衛隊になってしまう。何も戦争のことなんか心配しなくてもいいのである。たとえオイル・ショックを受けても、日本のレトリックはびくともしない。世界中のガス・ステーションは〈値段が上がりました〉でも、日本のレトリックはそのレトリックのおかげでただ〈値段が変わりました〉である。

これはどの国でも見られる単純な遠回しのレトリックとは違い、盲を目の悪い人、狂人を変わった人と指称する差別語に敏感な日本社会の一特色を反映したものと見られる。韓国では、老人を社会的に優待しようとするときには、公式的に〈敬老〉という言葉を使っているが、日本の場合には、シルバーである。厚生省がコンクールを行って、中年を実年、老年を熟年と呼ぶようにしたのも、その例の一つである。

しかし、この遠回しの伝統的な例がネガティブに作用すると、事実を隠ぺいする言葉だましになることが多い。盗

むことを稼ぐといい、ばくちを手慰みという。魚以外の肉が禁じられていた江戸時代に猪の肉を食べるとき、それを山鯨といい、今でも野鳥料理屋では保護鳥である「つぐみ」を食べるときには〈大雀〉と呼んでいる。かつての日本軍が使用したレトリックにも、これと同じパターンのものが少なくなかった。ガダルカナル島を撤退するとき、日本の陸軍は〈転身〉という新造語を使っていた。危機の原因を探して、それをロジックで変えていこうとするよりは、ノシ紙を載せてそのまま包んでおこうとする傾向が見られる。

このレトリックのずれが外国との問題に絡み合うと、歴史教科書の〈侵略＝進出〉の争いになってしまう。実体から遠くはなれた言葉のあやが、外国人の目には何かをごまかしたり偽装したりしているように映って誤解される。

二、感覚による意味の疎外－岩戸から天照大神を引き出そうとした戦略を感覚のレベルで分析してみると

視覚的イメージ――尾長鳥を鳴かせる
視覚的イメージ――鏡を作る
聴覚的イメージ――ヌードで踊る

これらは皆、重金神から出たものだから、観念が感覚によって具象化されている。

日本のレトリックは、公衆電話を赤電話、一等列車をグリーン車にしてしまった。意味は色に吸収される。そして何の色もないところに緑の窓口があったり、木の椅子が突然シルバー・シートになったりする。感覚優位のレトリックは、ノンバーバルなコミュニケーションの傾向に走る原因にもなっている。そこから「茶道」の独特なコミュニケーションに見られる〈ものの取り合わせ文化〉、または〈お祭りのふれ合いの文化〉が生まれる。

感覚優位のレトリックでは、「仮名手本忠臣蔵」のネーミングに見るように、意味のレベルにおいてもシニフィアンに重点を置いている。松江重頼の「毛吹草」に現れているレトリックのシステムの一つである〈言い立〉も同じものだ。いろはからレトリック例を取れば、「雨露は木々のいろはの師匠かな」の句で、いろはは色葉（紅葉）であり、同時にイロハの仮名である。雨露からは〈雨露の恩〉という成語といろはからは仮名手本の連想で、師匠という意外な言葉と結ばれている。

このように論理の因果的つながりより感覚によって意味が展開されているものが、俳句のレトリックの特徴でもある。

シンタックスのレベルでは、「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」を例に上げることができる。柿を食うことと鐘が鳴るということは何の関係もない。俳句の切れ字的機能で論理を埋めていく〈間のレトリック〉は、人間関係にもビジネ

スの世界にも多く見られるものである。

感覚は具象的なもので、抽象的な普遍性には弱い。日本人のコミュニケーションで一番不利と見られる弱点が、この普遍性の欠如である。

三、「内」のレトリック―これはコミュニケーションの否定ではない。それこそもっとも繊細なコミュニケーションの一方法で、釈迦の逸話とともに以心伝心と呼ばれた東洋の一種のレトリックである。しかし、日本ではそれが極端に発達して、腹芸と呼ばれてきた。よく指摘されていることだが、貿易摩擦をはじめ国際紛争が起こったときに、日本は自分の立場を明らかにしたり、相手を積極的に説得していこうとしない。ブレーカーが「日本の国際交渉態度の研究」で指摘しているとおり、日本人が何かの紛糾を妥結しようとするとき、いちばんよく使う決まり文句は〈誠意をもって〉という言葉である。誠意とは何も意味していない。ただ相手を読む虚言を腹芸で根回し、かき回し、後回しをするレトリックである。

四、日本語の侮辱語

こんな視点からみると、日本語には緊張を高める言葉が、韓国にはテンションを解す言葉が多いのも当然なことだ。その一つとして、侮辱語が少ないのが日本語の特異性とも言われている。アメリカ人の日本研究家ジャック・スワーボドさんは、いろいろな言語における侮辱語の比較研究を読んでみたが、日本語に関するものがないので、自分で熱心に日本語の侮辱語を集めたという。その結果、五十～六十語の侮辱語を見つけたが、何百何千の英語の侮辱語に比べれば、問題にならない数だとコメントしている。量も量だけど、その質においても日本語では侮辱語が貧弱である。もっともよく使っている〈畜生〉は、ケダモノを意味するアカデミックな仏教語で、六趣・十界の一つである。〈キサマ〉も貴様のことで、近世中期までは目上の人に対する敬称であった。ののしりの言葉とは正反対の意味をもったものである。相手をいやしむ語の〈てめえ〉も手前のことで、元は丁寧語であった。こうした状況だから、日本には〈堪忍袋〉という特殊なものがあり、その中に何でもじーっと蓄えておくしかない。こうして堪忍袋の緒が切れると大変なことが起こる。

韓国語には冗談語からはじまった何千何万ののしり語や侮辱語がある。それを〈ヨック〉（辱）というが、この多彩極まりない言葉を使うと、胸がスッキリしてすがすがしくなる。韓国の〈ヨック〉は塞がれた心の煤を取る煙突掃除であり、心の筋肉をゆるめるマッサージ療法である。

言葉の音韻にしても日本語の母音は単純である。だから日本では〈尻とり遊び〉がよく発達しているのだ。しかも

子音も濁音が多いので、やわらかい言葉が多い。緊張感をカタルシスするにはあまりにもやさしい言葉である。それに比べて、韓国語の基本母音は日本語の四倍から五倍もあり、複雑である。そして花火のように爆発する強烈な破裂音が多いので、心を解すのに適している。

五、刀の反レトリック

無言のコミュニケーションがネガティブに働き、その断絶が深まると、最後にはそれこそ問答無用の力の行使になる。コミュニケーションの基は問答にある。それを無用とするときには、天照大神を力でもって引っ張り出した天手力男命が登場する。そして柔らかいレトリックは極変して、荒々しい反レトリックの世界に向かっていく。このような転換を日本人はよく堪忍袋の緒が切れたと表現する。内匠頭侮辱を受けたことを記録に残した、唯一のものといわれる「堀部弥兵衛金丸私記」にも、刃傷事件が起こる前、内匠頭がじっと堪忍していたことが書かれている。太平洋戦争が起こったときの言い訳もやはり、堪忍袋の緒が切れたということであった。一応緒が切れると、盲を盲と言わないで目の悪い人という〈あの優しい遠回しのレトリック〉は、目玉焼のような直接的なおかつ残忍なレトリックに変わる。日本人の食べ物のネーミングを調べてみると、これはよくわかる。目玉焼、親子どんぶり、刺身などがその一例である。もちろん人を殺す剣術の〈竹割り剣法〉などの用語は言うまでもないが、日本語には刀と関係のある表現が多い。背信を裏切りといい、横から助けるのを助太刀という。

表面からみると、日本のレトリックの本質である〈柔らかさ〉と矛盾するように思われるが、実は物事をはっきり解明し、説得で解決しないで、それを包んで隠そうとした、あの暗闇から必然的に生まれた双子なのである。

こういう観点から分析していくと、赤穂義士のドラマは忠とか義理の手本というよりは、コミュニケーションの手本として捉えなければならない。天照大神と須佐之男命との紛糾も、赤穂の事件も、その原因はみな確かでない。

浅野・吉良らの摩擦は何であったのか。男色の欲望説、茶器をめぐっての摩擦説、赤穂塩の製法伝授にまつわる不和説、接待費削減による不満説、賄賂不足説など、それこそ百の原因が上げられているが、本当の原因はただ一つ、双方の闇に横たわっていたコミュニケーション・ギャップといえよう。

ほんとうのコミュニケーション機能は、同質よりも異質のものの間で行われるものである。万の神々は自分たちよりも天の岩屋に立てこもった天照大神とコミュニケーションしなければならない立場にあった。吉良・浅野とのコミ

ュニケーションが上手にいっていたならば、赤穂事件は起こらなかったかもしれない。君とぼくのコミュニケーションはもっとも発達しているが、彼とぼくには激しいギャップがある。日本の言葉使いにはエントロピー値が高いものが少なくない。極端な縮小語とか、同音意義の掛け言葉がわりと多い。

レトリックは根本的に言葉を加減するものである。ゼロのレベルから加えたり減らしたりする加減がもっとも極端な差を見せているのが、日本語と言ってもよい。いたるところに〈お〉と〈ご〉を付け加えて丁寧語をつくるとか、候（ソウロウ）文のように同じ言葉を繰り返したりする。しかしまた、日本語より縮小語や短絡語が発達した言葉もそう多くない。西洋の外来語はもちろん、同じ漢字を使っていても、中国では日本のように縮語を使わないと言われている。鈴木修次氏が挙げた例から若干紹介してみる。（図表）

挨拶言葉においても同じ傾向が発見できる。「ただいま」は「ただいま帰りました」、「さようなら」は「さようならば、ここでおいとまを乞います」の下を省略したものである。

中国	日本
外資資本	外資
疲労過度	過労
感激的眼涙	感涙
休息日	休日
一国民族特有的武技	国技
生下来的嬰児	産児
需要和供給	需給

拙著で指摘したように、こんなレトリックから日本の「縮み志向的」文化の特徴を垣間見ることができる。

これは内のコミュニケーションを固める暗号的機能があるからである。「国性爺合戦」には、食べ物のむすびを相撲とりのむすびと勘違いしている中国人の話が出てくる。これは日本人のアイデンティティを確認する作用を効果的にはたしている。身内の者でないと、そのコードを読むことができないからである。日本の氏名はふりがながないと、どう読むのかわからない場合が多い。漢字音で読むのか、大和言葉として訓読みをするのかを決めるのは、家族内のコードに属する。そういう意味では、日本の氏名は本質的に二人称なのだ。内のレトリックは、同質性を帯びている

闇のレトリックなのである。

三

日本人は数千年の間、アジア大陸の文化と欧米の近代文明を取り入れながら、独自のレトリックを磨きあげてきた。そして〈いろは歌〉のように、シニフィアンの体系が一つのシニフィエと奇跡的に出合う世界に類がないレトリックを生んだ。だが同時に、赤穂事件のように何のための摩擦かを知らずに、四十七士の生命が犠牲にされたのだ。

天の岩戸の神話と仮名手本忠臣蔵を創造したレトリックが、今の国際社会では摩擦を起こすコミュニケーション・ギャップの一原因を生み出しているのである。

イメージと実像造りから新しい説得の論理をたてていく〈もう一つの神話〉、つまり天照大神が自ら天の岩戸を開いて、光とともに歩んでくる「すがすがしいレトリック」を開発しなければならない。現在はまさにそうした時代なのである。

コメント　**山田慶児**

たいへん面白いお話で、教えられるところもいろいろある論文なのですが、全体としてみますと、私はたいへん大きな学問的なとまどい、違和感を感じます。それには、おそらくある程度個人的な背景があると思います。

私は、大学では自然科学者として訓練を受けて、その後、自然科学史の研究にはいって、はじめのうちはヨーロッパの近代科学の形成史を勉強していましたけれども、その後間もなく中国科学史の研究に入り、現在では中国の古代科学の研究を行っております。多分、私のそういう積んできた学問的な訓練が、一つのとまどい、違和感の前提になっているだろうと思います。

二番目には、私は李さんほど日本文化について深く広い知識を持っていない。たとえば、私は忠臣蔵というのをよく知らないのです。芝居をまだ見たことがありません。私の忠臣蔵に対する知識は、多分平均的日本人以下でしょう。

三番目に、たとえば、李さんが使っておられる記号論的な方法、これも私はあまりよく知りません。昨日キーンさんが記号論の本が十七万部売れたということをおっしゃいました。私も多分そのたぐいの本を一冊読んだことがありますから、私の記号論に関する知識は、十七万人の日本人と大体同じ程度であります。

そういうことがおそらくとまどい、違和感の前提にあると思いますけれども、それだけではないと思います。李さんは『縮み志向の日本人』というたいへん刺激的な、優れた日本文化論を書いておられる。これに対しては、私はそれほど大きな違和感、とまどいを持たない。しかし、今日のご報告については、非常に大きなとまどいと違和感をいだきます。

二つあると思います。一つは、今日適用された記号論的方法が普遍的な方法になり得ていないのではないかという疑問です。私は方

法的普遍主義という言葉を使いたいと思います。もっと具体的には、また後で説明いたします。もう一つは、現象を分析する命題、あるいは言明は、常にそれが成り立つ前提や条件を明示すべきだと思います。従って、あらゆる言明、ステートメントや命題は、限定的な表現の形を取るべきだと思います。しかし、それが守られていないということであります。

私のとまどい、あるいは違和感はどういうところにあるか、具体的にお話いたします。まず、その第一は、天の岩戸神話の取り上げ方であります。これは、日本人の反レトリックの世界の象徴として取り上げられましたけれども、これを例に取ることはまちがっていると、私は考えます。なぜかといいますと、天の岩戸神話は、日食を払う呪術的な儀礼だからです。呪術には、最初から説得という要素は含まれていないからです。

日本書紀には四つの岩戸神話が書かれております。その中には二つの型の呪術があります。一つは、フレーザーが模倣呪術とか類関呪術と呼んだ、太陽が出現する状況を音とか、形とか、色とか、しぐさとか、言葉を使って現出することによって実際の太陽を呼び出そうとする呪術です。もう一つは、太陽を隠しているもの、それに直接に攻撃を加えることによって太陽を救い出す、いわゆる攻撃的な呪術であります。この二つの呪術が含まれております。

初期の岩戸神話の第一のものは、ふいごで鉄のかたまり、熱い丸いかたまりを多分作るんだと思うのですが、金属の太陽を作りだすという呪術であります。第二番目は、この金属のかたまりが鏡に代わります。ここまでは模倣呪術あるいは類関的な呪術と呼ばれるものです。第三の神話になってはじめて攻撃的な呪術の要素が加わってきます。それを表しているのが、手力男です。手力男は何をするかというと、太陽を隠している岩の扉そのものに攻撃を加え、それを開けます。そして、第四の神話になって、さらに手力男に加えて二つの要素が登場します。それは、長鳴鳥と、天宇受売という女の巫女なのですね。長鳴鳥はもちろん夜明けを告げる音声的なもの、もう一つの天宇受売というのは何を表すかというと、私の考えでは、手力男とまったく同じ、攻撃的な呪術を表しています。

それは何によってわかるかといいますと、第四の神話で宇受売が登場しますと手力男が役割を失うのですね。天宇受売は踊りながら次第に神がかりしていくわけですけれども、それを聞きつけて、太陽神の天照は、自ら岩戸を開けて出てくるのです。体を半ば出してしまうのです。手力男はどうするかというと、その天照の手を取って外へ導くだけなのです。ここには力は加えられていない。言い換えれば、手力男の攻撃的な呪術の力は、宇受売に移っているわけですね。

もう一つは、宇受売という名前ですが、はっきりわかっていないそうですけれども、一説によると、力の強い女という意味だと言われています。私も多分それが妥当だろうと思うのです。それでは、宇受売はどうやって攻撃を加えるのかというと、おそらくしぐさと言葉による攻撃だと思います。つまり、彼女は踊りながら神がかりして、その神がかりの中で、おそらく岩戸を攻撃するしぐさをし、呪文を唱える。その二つを通して岩戸を攻撃する。それによって岩戸は開く。そういう構造になっているのだろうと思うのですね。残念ながら、彼女のしぐさと呪文は記述されていませんから、証明はできません。

古事記の場合は、この第四の神話を取り上げるのですが、実は、私の考えでは、古事記の作者はここに一つの新しい解釈を下します。その解釈は、本来の呪術とはそぐわないものです。加えたのは何かといいますと、宇受売は神がかりして踊りながら、次第にほとんど全裸に近い状態になっていくのですが、それを見て神々が笑ったと書いてあるのですね。その一句を付け加えているわけです。ところ

が、それはおかしい。

いまでも沖縄とか奄美の巫女は神がかりして踊りながら体をはだけていって、ほとんど全裸になって踊る。私もビデオを見たことがあります。ただ、残念ながら、本当に裸になる場面はありませんでしたからわかりませんが、この踊りそのものは、見ている人の笑いを誘うようなものじゃないのです。私は、あの場面で、その儀礼に参加している人々が笑うということはあり得ないと思います。

なぜ、笑うという情景を作者が付け加えたかというと、作者はこれを呪術的儀礼の場面ではなくて、いわば宴の場面、祭りの場面に解釈し変えてしまったのですね。そこでその一句を付け加えたのです。しかしながら、少なくともそれを除くならば、古事記の場合も依然として完全な呪術の記述で、呪術は申すまでもなく、説得という要素をはじめから含んでいません。

日食を祓う呪術は、たとえば古代中国にもあります。古代中国の呪術では、攻撃的呪術という性格がもっと強く出ております。古代中国人の考え方によりますと、天にある生き物がいて太陽を食べる。そこでその生物をおどして追っ払って、太陽を救い出さなければならない。それを日食を救うと言います。どうするかというと、王が自ら日食の間、太鼓をたたき続けるのです。太鼓の者はもちろん攻撃を表します。

私は、古代ギリシャに日食を祓うどういう呪術があったかよく知りませんが、ここで李さんは、古代のギリシャのアゴラにおける弁論、説得の場面と、天の岩戸神話を対比された。しかし、こういう対比は成立し得ない、と私は考えます。それらはまったく性質の違った問題です。しかし、ギリシャにも同時にその種の呪術はあった。ソクラテスがアゴラで青年たちと対話を交わしていた時代は、ギリシャで広範に呪術が復活した時代だと言われています。もし比較するなら、そういうものと比較すべきだと思います。そうすれば、確かに岩戸神話にしても、あるいは中国、あるいはギリシャのおそらく呪術にしても、一つ一つの要素は完全に呪術的でありながら、それらの要素が作るディスコースは違っているわけですから、それを比較することによって、それぞれの文化の特性について何らかの示唆を与えることはできるだろうと思います。同時に、その示唆は、限られた範囲でしか有効性を持たないような、そういう命題になるだろうと、私は考えます。

第二の点は、忠臣蔵ですが、いま述べた神々の笑いは、私に言わせれば不自然であり、あり得ない笑いであります。その笑いを、李さんは、復讐を決意して、その復讐を隠すためにお茶屋で遊んでいる内蔵助の笑いと等質のものと言われるわけですね。しかしこれは、私の想像力の範囲を超えます。私には、はっきり言って理解できません。また、手力男の呪術的な攻撃の力、技と、復讐のための討ち入りがどうして等質なのか、これは私の理解を超えています。

しかし、ともかく李さんは、岩戸神話と忠臣蔵、この二つを結ぶ線の上に、さらに五つの命題を出しておられるのですけれども、時間もありませんので、これは申し上げません。

要するに私が申し上げたかったことは、それぞれの文化は、もちろん独自なもの、固有なもの、特殊なものをたくさん持っているし、それらは、桑原教授が言われたように、その中に育った人間にとっては抜きがたいもの、あるいはレヴィ・ストロース教授が言われたように、外の人間にとっては結局理解できない部分が残るような面を持っていると思います。しかし、それを分析する方法は普遍的でなければならないと思います。私が方法的普遍主義と言っているのはどういうことかといいますと、いかなる特殊な現象といえども普遍的なもののある特殊な発現形態であるという形で把握させるような方法、あるいは特殊なものを把握することが普遍的なものへの通路であるようななんらかの方法のことです。

私は記号学をよく知りませんけれども、おそらく記号学そのものにはそういう方法があるのでしょう。なぜかといいますと、実際に李さんは『縮み志向の日本人』の中では、人間の精神の創造的な働きを、縮める、凝縮するという方向と、広げる、拡大するという方向の二つの軸でとらえて、日本人の中には縮める、凝縮するという働きが非常に強い傾向としてあると想定されて、それによって日本文化の一面を非常に鋭く取り出してこられ、照明を当てられた。これは普遍的な方法であるといえます。

縮めるほうも広げるほうも、どちらも世界を把握する方法なんですね。広げる場合は、対象のなかに自分が出ていって、対象の大きさにまで自分を広げる。それによって対象を把握する。縮小するほうは、対象の世界を自分と同じ大きさに、自分の中に入るような大きさに縮めて、それで世界を把握します。どちらも世界を把握しようとする方法の対極にあるもの、従ってこれはある条件のもとではいつでも反転し得るもの、一つの文化の中で、その二つの傾向は常に存在し得るし、場合によっては個人の中にも共存し得るもの、と私は考えます。しかし、残念ながら、今回の分析に関しては、そこに適用された方法は、普遍的なものにまだなり得ていないのではないかという気がいたします。

大石　どうもありがとうございました。李さんがたいへん刺激的な報告をなさいまして、コメントのほうも若干そういうような側面があったようでございますが、まず、何か逆にコメントをつけられることがございましたら。

李　レトリックというものは、よくご存じのように、話し方の問題であって、話の内容を探るものではありません。ここで取り上げた天照大神の読み方も、それが何を意味するかではなく、岩戸を開く戦略、すなわち天照大神をいかに説得して、岩戸を開けたかという態度だけに関心をしぼったものです。そうですから、テキストが指示している世界に興味を寄せたのではなくて、テキストそのものの形式を観察の対象にしているわけです。ですから、実証的な神話の読み方以外にもいろいろな読みがあること、また発表者がどの立場でテキストを読んでいるか認めない限り、議論が成り立たない恐れがあります。

それが神話であれ歴史的事件であれ、また文学作品であれ、「説得の仕方」を探る資料だとしてみれば、同じ一つのレベルの上で観察することが可能になります。

韓国の檀君神話は天照大神の神話とはまったく異なった内容をもっていますが、何かの欲望を果たすために、神を説得するという機能は同じです。しかも万の神が言葉で議論しているのを否定的に再現し、蠅がぶんぶんする音にたとえているものとは対照的な意味をもち、檀君神話のほうがより弁証的だということがわかってきます。熊と虎の二項対立、神との問答と自己変身が神を説き伏せ、結婚に向かわせる武器に使われています。しかし天照大神を岩戸から引き出した力は問答ではなく、パフォーマンスのイメージによる誘引でした。

そうですから、E・T・ホールの分類に従えば、日本のレトリックはハイ・コンテキストに属します。西洋のロウ・コンテキストによるコミュニケーションとは違う道を歩んできました。その結果、一座建立のように言葉よりも言葉の場を作っていく触れ合いがもっとも発達したレトリックを生んだということです。記号論的用語でいえば、ヤコブソンがコミュニケーションの六つの機能の一つとして指摘したパセック・ファンクション(pathic function)と同じものですね。そうですから、「審議する」「裁く」「示す」というレトリックの三大目的のなかで、日本では演示的志向に傾

き、日本人が好む型、きまり、しきたりなどの文化が作られてきたと思われます。

ですから、今ここで問題になっている岩戸の神話とか忠臣蔵は、それ自体が研究の対象というよりは、ちょうどニュートンにおけるリンゴのようなティーチング・マシーン、またはポスト・モダン批評でよく使われているアレゴリーと同じ意味で作用しているのです。こういう観点が理解できるようになると、お互いの議論の的は、リンゴそのものから離れ、それによって引き出された万有引力、すなわち「日本的レトリック」の特徴に向かうようになれると思います。

私はどんなご批評もありがたいと存じていますが、なるべく真っ向から否定するよりは、レトリックとか記号論の同じ土俵にお立ちになって、日本のレトリックの特徴として指摘された項目がはたして正しいものか、本当に有効な意味があるのかに対して、お話を進めてくださるようにお願いいたします。

伊東　話をもとに戻して申し訳ありませんけれども、村井先生のお話の方にちょっとコメントさせて頂きまして、李先生の今日の非常に興味深いお話につなげようと思います。

茶道の問題ですが、ここでリンハルトさんが質問されて、それは一部の人のことではないかということに対して、村井先生は、確かにそれは一部の金持ち階級のこと、一部の都会の人のことで、従ってお金がなければ茶器も買えないし、そういう楽しみは一部の人のものなんだとおっしゃいました。しかし、ここで柳宗悦の力説した民芸というものを我々はやはり思い出したいのです。

日本人は、貴族とか、庶民、職人、非常に広い層にわたって、物を作り、その物を愛したのですね。茶器とか、土瓶とか、それは高級なものから、本当に日常的なものまでありますけれども、日常的なものだから価値がないということではなくて、それを庶民のレベルから、すべての人たちが自分たちの作った物を非常に愛して、全国民的な規模でそういう民芸が発達し、その歴史が蓄積された。この事実を、やはり忘れてはいけないと思うのです。

そこには、物と人との関係ですが、この物と人との関係というものが、デカルト的な二元論のように、メンスとコルプスというふうに二つに分かれないで、柳宗悦の本を読むと、自分が十年間使った茶器はあたかも生きているんですね。自分の友だちなんですよ。そして、その茶器には、心があるんですね。そして、彼は、その茶器と対話しているわけです。

ここにはやはり、デカルト的な二元論、物と心の二元論を超えた、つまり、山川草木のみならず、物をも生きとし生けるものの一つの領域にまで取り込んでしまうような文化が、これは庶民レベルに至るまで、非常に広く流布して、日本で行われたということ、このことをやはり指摘しておかなければいけないのじゃないかと思ったわけです。

次に、茶器だとか陶磁器と言えば、韓国には非常に優れた伝統があるのですが、柳宗悦がたくさんの書物で言ったような、そういう物に対して生き物と同じような愛着をもつようなことが韓国にもあるのかなということを、ちょっとお聞きしたいわけです。

もう一つ、ふれあいの文化ということで、李先生のお話に移りますけれども、私は、いまのお二人の話を聞いていて、山田先生のおっしゃることも非常に理があり、整然として論理的だけれども、李先生がまったく理のないことをおっしゃったとも思いません。やはり、日本文化の一つの非常に大きな特徴を、韓国と比べて、指摘してくださっているのではないかと思います。それはやはり、ふれあいの文化、みんなでやる文化、座の文化、シェアする文化という形のもので、茶道もそうでしたが、連歌もそうでした。非常に日本的な芸術というものは、個人が一人でやる孤独な作業というよりも、一つのグループを作って、みんなが美とか感受性をシェアする。みんながシェアするから、そこに共通の場がある。

だから、短歌とか俳句といったような、非常に短いけれども、セイシビリティの共同性というものがそこにあるから、ながながと言う必要がない

わけですね。その言われないところは、共同のセイシビリティで補って、イマジネーションをすればいいわけで、そこにむしろ美の本質があるので、全部言い切ってしまったら、むしろつまらないものになってしまうのじゃないでしょうか。

ロゴスの文化というのは、こういう領域を否定してしまって、ロゴスを多くすれば多くするほど感受性や想像力は減少してしまうのじゃないでしょうか。その空いているところに我々は感受性を挿入して、感情のきずなを結ぶわけです。日本のいわば「沈黙の次元」の文化というものは、ロゴスの次元も重要だけれども、相補的な意味において、両方とも必要なので、これからの世界においても、互いに思いやって、言わなくたってわかる、そういう共同の了解の場というものをできるだけ広げていくということが、やっぱりこれから必要になってくると思うのですね。

コタンスキー　李先生の発表に少し疑問がありますので、それについて述べたいと思います。

まず一つに、レトリックの問題を扱う場合、記述と会話とでは異なるだろうと思います。レトリックには、記述のレトリックもありますが、会話のレトリックもあります。そして会話のレトリックの中には、言葉の代わりに、たとえば笑いというようなものもあると思います。神さまが天の岩戸の前に座って笑ったのも、あれもレトリックの一つでしょう。沈黙も同じように、レトリックの一つではないかと、私は思っております。

ここで私が言いたいことは、天の岩戸の場面で、「万の禍ことごと起こりき」という状態になってそれを改善する必要に迫られ時、神々は言葉によるレトリックを適用してみたが、それが全く効果のないことを知り、最終的には「朝と光」を演出するだけでなく、笑ったり裸で踊ったりするという振舞いの手段を用いて、それが効果的であったという点です。このように考えると、「自己の意見を主張して、相手の態度を変えさせる弁論」というレトリックのみが、最良のものとは言えないということになります。適当な結果を齎すのには、相応な手段が必要だからです。

さらに進めてもう一つ言うならば、レトリックにそのような振舞いを加えて幅を広げるとしても、それによって拡大するのは手段だけです。そうした手段を用いて、話し手は種々な目的を達成するわけですが、私はその目的を考えてみることも必要だろうと思います。普通それは、教えたり、説得したり、感動させたりするという目的ですが、思うに、日本の大昔には言葉の持つ神秘な力、即ち言霊という現象を顕現させるという目的も重要だったと考えます。

古代日本においては、言葉と物事との区別が薄く、言葉はそのまま事実と信じられていたわけです。例えば名前が傷付けられ呪いを受けることは、即ちその人が傷付けられることだと考えるごときは、この言霊信仰によるものです。多分、言霊がある為に、古代の日本人はある時は言葉を謹み、またある時は言葉を荒げたりして、具体的な目的を達成しようとしたのでしょう。ですからレトリックの問題を研究する場合、言霊のことも調べる必要があると思います。

李　外国人でも今日日本学をなさっておられる方は、「考える」とは言わないで「考えさせてもらいます」と言っています。どの分野においても、日本研究はすでにこの受け身の日本独特な表現から始まっているといってよさそうです。考えるということと、考えさせられたということは、意味のレベルでは同じことを指示していますが、その態度と精神はたいへん違っています。この違いこそ、抽象的な文法と言葉を実際に使っているレトリックの違いであり、他の学問からジャパノロジーを差異化するものでもあります。しかし残念なことは、土のなかに埋もれていたエジプトの石に刻まれた文字を解読するのは学問と思っていながら、現在われわれがもっとも多く使っている電話に対して話すことはだれも学問とは思っていないという点です。それで今回の会議のように立派な学者が多数お集まりになった席で、私のような犠牲者が現れるのも、未来の日本学において大事なことであると自ら慰めています。

日本人はよく曖昧な言葉を使っているといわれますが、このことについ

て学問的に接近した日本学というのは、あまりお目にかかりません。日本の国際化がこれくらい強調されていながら、コミュニケーション・ギャップと直接関係がある言葉のあやの問題を学問的に論究してみようとする人が少ないのは、不思議なことです。私は日本学者ではございませんが、『万葉集』程度は読むことができます。しかし日本の食堂の「準備中」と書かれた表札の意味がわからなかったのです。今開くかと「準備中」の店の前で待った恥ずかしい経験をしました。韓国で「準備中」といえば、文字どおり店が開くという意味にとり易いからです。

しかしこのような言葉遣いをちょっとだけ記号論とか情報理論で切り込んでいくと、日本的経営の特徴と相同性があることに気がつきます。日本は管理社会というより参加社会といわれ、工場でも独特なQCサークルが高生産性の原動力になっているといわれています。一分の隙もなくぎっしりとプログラミングされた西洋の管理化と違い、know why を重視する日本では、労働作業者が参加する気持ちに重みを置いています。

日本のレトリックもこれと同じくエントロピーが多いので、聞く人が積極的に参加しないと、コミュニケーションがとれない。ロゴス中心の言葉とは違い、きちんとした言葉より穴が多い言葉は、こちらから埋めていこうとする想像力がなければならない。そして暗号のように外部のグループにおいてはコミュニケーション・ギャップと断絶を起こす危険なレトリックが、内の世界では以心伝心のヒューマン・コミュニケーションの力になるのです。こういう視座から見ると、国際化とレトリック、産業化とレトリック、閉鎖主義とレトリックなどのボーダーラインを越えた新しい命題が起こってきます。このボーダーラインの土地に身を任せるということは、なにごとにも慎重な学者においては危険なものであり、不気味なものであります。しかしこの危険と不気味さに耐えることが周囲の批判を避けるより、もっと重要なことではないでしょうか。

山田　記号論に対する無理解のために、たいへん失礼なことを申し上げたかもしれませんが、これは学際的な研究集会でありますから、対岸からの批判としてお許し願いたいと思います。